

## 6 ツノナスかいよう病（新称）の発生

### ねらいと成果

2004年及び2005年の6～7月、兵庫県南部で、ツノナスの葉柄、茎が黒褐色に変色し、萎凋・枯死する症状が発生した（図1）。この原因を追及した結果、植物病原細菌の一種である *Clavibacter michiganensis* subsp. *michiganensis* によることが判明したため、日本植物病理学会で「ツノナスかいよう病」と呼称することを提案した。日本での発生は初めてで、発生拡大が懸念されるので、その特徴等について紹介する。

### 内容

#### （1）被害の様子

はじめ葉柄、茎に壊疽症状が発生し、病気が進展すると黒褐色となる（図1）。さらに進展すると株全体が萎凋し、最後には枯死する。初期症状を示す株を切断し、水につけると菌泥が噴出する（図2）。

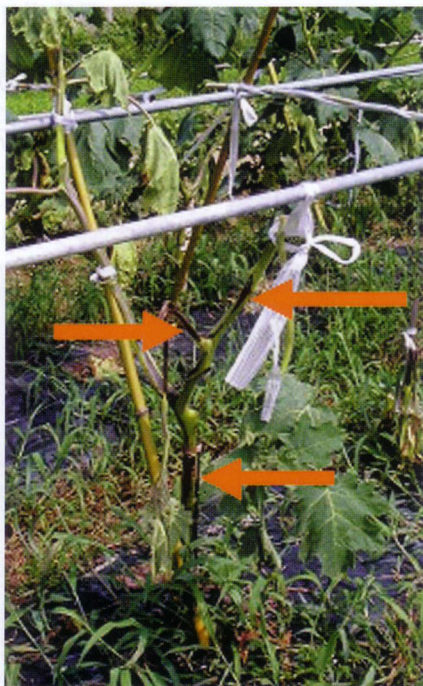


図1 かいよう病病徴

#### （2）病原細菌

*Clavibacter michiganensis* subsp. *michiganensis* という植物病原細菌では数少ないグラム陽性細菌の一種である。種子又は土壤中に残存する。発育適温は25～28℃である。トマトかいよう病細菌と同種でトマトにも病原性がある。

#### （3）伝搬様式

保菌種子と汚染土壤が第一次伝染源である。保菌種子をまくと、かいよう病細菌は苗の茎や子葉（ふたば）の表面で増殖し、自然開口部や傷口から感染する。汚染土壤ではかいよう病細菌が根の伸長とともに根圏で増殖し、傷口から組織内に侵入する。ツノナスの葉は大きく、風をまともに受けやすい上、葉柄がもろく、傷つきやすいため、その傷口から感染してしまう。

### 防除の留意点

- ① 種子は保菌していないものを用いる。また、やむを得ず自家採取を行う場合は、温湯処理（55℃、30分）による種子消毒を行う。
- ② ナス科作物との連作を避ける。
- ③ 風による傷害を避けるため、できるだけ防風ネットを設置する。

神頭 武嗣（農業技セ・病虫害防除部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2448）



図2 かいよう病細菌の菌泥